

コモモのランタン

雛鳥 雪花

森の湖のほとりにある家に、クルミばあさんが一人で住んでいました。クルミばあさんには、コモモという名前の孫娘がおりました。コモモは、森の中一人きりで暮らすクルミばあさんのことを心配して、毎晩家まで訪ねていました。コモモの持つ灯油ランタンの丸い灯りが窓に映ったら、それが合図です。

今日も夜の深まる時間に、リビングの窓に灯りがぽっと映りました。ちょうど、クルミばあさんが紅茶の準備をしていた時です。

「いらっしやい」

「こんばんは、おばあさん。お邪魔します」

二人は、いつもと同じ挨拶を交わしました。けれどそこに、いつもと違うことがあります。コモモの顔より大きく、真っ白な光を放っているそのランタン。千夜油（千日間火を灯せる油）を使ったとしても、ここまで明るい光は出せないでしょう。不思議に思って、クルミばあさんは尋ねました。

「そのランタンは、新しく買ったの？」

「いいえ。空のお月様をとってきたんです」

ふと見上げてみますと、今日は雲に隠れて夜空がよく見えません。クルミばあさんは、コモモが楽しい話を聞かせてくれたことが嬉しくて微笑みました。

それからコモモは、テーブルの上に自分が持ってきたバスケットの中身を並べました。

これも二人の間ではいつものことで、コモモの持ってきた果物のお菓子を食べながら紅茶を飲むのです。しかし、ここでもいつもと違うことが起こりました。その日コモモが持ってきたものは、にんじんクッキー、にんじんタルト、にんじんドーナツ……と、なぜかににんじんを使ったお菓子ばかりだったのです。

「コモモは、にんじんが好きになったの？ それじゃあ、明日はばあさんが、にんじんケーキを作って待っていきましょうかね」

クルミばあさんのアイデアに、コモモは笑顔でうなずきました。ささやかなお茶会を終

えて、コモモは家へ帰っていきました。

それから程なくして、クルミばあさんの家の扉を誰かが叩きました。クルミばあさんが扉を開けると、なんとそこには、先程帰ったはずのコモモが立っていたのです。おおよそ、コモモが忘れ物でもして取りに戻ってきたのだろうとクルミばあさんは思いました。しかし、ここにいるコモモは

「こんばんは、おばあさん。お邪魔します」とまるで今日初めて会うように、いつもの挨拶をするのです。それに、コモモの持つランタンもいつもと同じものでしたし、バスケットの中身も、まだ手付かずの状態でした。クルミばあさんは、首をかしげました。

「ねえ、おばあさん。今日は月が綺麗よ」

コモモに促されて外へ出てみると、先程かかっていた雲はどこへいったのでしょうか。空ははるか遠くまで澄み渡り、先程のコモモが持っていたランタンのような月と、その表面にうさが浮かんでいました。